

祈りとの出会い

川口基督教会牧師 司祭 ステパノ 柳 時京

もう一年半前のことです。コロナ禍が始まって間もない頃に、誰からということもなく、数人の信徒との話し合いで、毎日共に祈り合いたいという話がありました。思えば以心伝心の働きの結果でした。そこで、毎日夜9時に心を合わせてコロナウイルスの終息を願って「主の祈り」をささげるよう約束しました。

私は、出来る限り聖堂の中でロウソクをつけて、9時から30分ないし1時間ほど祈っています。先ず「主の祈り」をささげ、週報の代祷項目を覚え、信徒名簿を1頁ずつめくり、信徒の皆さんの顔を思い浮かべています。情けないことに、真冬の何日かは聖堂での祈りをさぼったりもしましたが、お祈りは欠かさず続けています。

そういう中で、ウルグアイの小さな聖堂の壁に刻んである「主の祈りをささげる際には」という次の祈りに出会いました。

『天におられる』と言うな。世俗に浸っていながら。『わたしたち』と言うな。自分ばかり思って生きていながら。『父よ』と呼ぶな。神の子どもとして生きてないのに。『み名が聖とされますように』と言うな。自分の名を輝かせるのに必死なのに。『み国が来ますように』と言うな。物質万能の国を願いながら。『みこころが天に行われるとおりに、地にも行われますように』と言うな。自分の望みどおりになるように祈りながら。『わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください』と言うな。死ぬまでの糧を蓄えていながら。『わたしたちの罪をおゆるしてください。わたしたちも人をゆるします』と言うな。心に誰かへの憎悪を抱えながら。『わたしたちを誘惑におちいらせず』と言うな。時折罪を犯していながら。『悪からお救いください』と言うな。悪を見ながら良心の声も聞かないくせに。『アーメン』と言うな。主の祈りを心より自分の祈りとしてささげてないなら。

宗教改革の旗を掲げたマルティン・ルターは「キリスト教の歴史における最大の殉教者は『主の祈り』である」と嘆きました。心からではなく習慣的に口ずさむことで、主の祈りに込められた主イエス様の教えを軽んじているのではないかとの警告でした。

これからも、コロナ禍の終息まで毎日「主の祈り」を共にささげていきます。習慣的な祈りではなく、自分自身の祈りとして、そして、主の祈りを生きるように努めたいと思います。